

あなたの愛など要りません3



ヘンドリック

ランスロットの父。
謎めいた「白の世界」に
囚われている。

イライザ

ヴィオレッタの義姉。
我儘で、自分がこの世で
一番可愛いと思っている。

ラシュエル

ランスロットの母。

キンバリー

ランスロットの義父。
王国騎士団長。

ヴィオレッタ

レオパーファ侯爵令嬢。
幼い頃に母親と死に別れ、
継母と義姉から使用人同然の
扱いを受けている。

スタッド

ヴィオレッタの父。
レオパーファ侯爵家当主。

イゼベル

ヴィオレッタの継母。
スタッドの前妻を妬んでいる。

ランスロット

バームガウラス公爵かつ
王国騎士団の騎士。
誠実で愛情深く、
責任感が強い性格。

登場人物紹介

CHARACTERS

プロローグ

『いつてらっしゃい、あなた』

『気をつけてね、お父さま』

王都レオパーファ侯爵邸のエントランス。

私とお母さまは、仕事に向かうお父さまに、ひらひらと手を振る。

お父さまは今日から事業取引の予定がいくつも入っているらしい。戻りは早くて数日後だ。

『寂しいわ』

小さくなっていく馬車を見つめながらぼそりと言葉がこぼれた私に、お母さまが振り向いて笑む。

『お母さまもよ。でもお仕事だから応援しないよね。わたくしたち家族のために、お父さまは頑張ってくださいているのですもの』

青い目を柔らかく細めるお母さまの金色の髪が、朝日に照らされてきらきら輝く。

まるで光の冠を被っているようで、思わず『綺麗』と呟くと、『あら、あなたもよ』と返される。

お母さまの色をそっくりそのまま受け継いでいると思いきや、恥ずかしくも照れくさく、ふたりでくすくすと笑い合う。

体が弱いけれど、聡明で優しく、いつも明るいお母さま。

レオパーファ侯爵家当主として、領地管理と商会の運営に励むお父さま。

ふたりの間に生まれたたったひとりの子、それが私——ヴィオレッタ・レオパーファ。

公爵令嬢だったお母さまと、侯爵家のひとり息子だったお父さまは、それぞれの家の事業を提携するために、この国にしては珍しく、比較的若い頃に婚約した。

いわゆる政略結婚だけれど、お父さまとお母さまの仲は睦まじく、結婚して一年ほどで私が生まれている。

一夫一婦制が基本のこの国は、女性の爵位継承を認めている。

だから、あまり体が丈夫でないお母さまを気遣ったお父さまは、これ以上子どもを作らないことに決めた。

法が許しても娘を後継者にする家はそう多くない。男児を望むというただそれだけの理由で、離婚再婚を繰り返す貴族もいる。

子を生めるけど、生まない選択をする家は珍しく、夫婦仲がよいと見なされるのは当然で、私もまた両親をそのように思っていた。

そう、私は信じていたのだ。お父さまはお母さまを、そして私を深く愛してくれていると。

今から四年前——私が十四歳の時に、お母さまが亡くなるまでは。

『彼女はイゼベル。ヴィオの新しいお母さまだよ』

亡くなったお母さまを深く愛していたはずのお父さまは、最低でも半年は喪に服するのが慣例であるにもかかわらず、葬儀からわずか一週間後に次の妻を迎えた。

お父さまの隣に当たり前のよう立っているのは、お母さまとは似ていない、鮮やかな桃色の髪と目が印象的な女の人。

青ざめる私の姿を捉えて、真っ赤な唇がにっこりと弧を描く。

さらに、私と同じくらいの年の少女がその隣に立っていた。同じ桃色の髪だから、きっと母娘なのだろう。

でも目の色は——お父さまと同じ辛子色。

お父さまが微笑み、言葉を続ける。

『この子はイライザ、ヴィオのひとつ上だからお姉さまになるね。血の繋がった姉妹同士、仲良くしてくれると嬉しいな。私とイゼベルとイライザとヴィオ。今日から四人家族だ』

これまでと変わらないお父さまの柔らかな笑顔が、私をさらに混乱させる。

——どうして？

私とお母さまを『宝物』って呼んでいたじゃない。

いつだって笑顔で、優しく、一度も声を荒らげたことなどなくて。

愛されていると、心の底から信じていた。疑ったことなど一度もなかった。

でも、違った。

お父さまは、私が生まれる前からお母さまを裏切っていたのだ。

どうしてそんなふうに穏やかに微笑んでいられるのだろう。まるで何事もなかったみたいに、真つ直ぐ私の目を見つめていられるのだろう。

悲しくて、悔しくて、お父さまの微笑みがどこか怖くて、私はたまらなくなつて部屋に駆け込んでしまった。そして一晩中、ベッドの上でブランケットにくるまって声を上げて泣いた。

部屋に閉じこもつて泣き続ける私を慰めてくれたのは、乳母のヨランダとその家族だった。

レオパーファ邸の使用人棟に住む彼らは、時間を見つけては私を慰めに来てくれた。

私の好みをよく知るヨランダは、食べ物や飲み物、用意する服や気晴らし用の本、部屋の香りに至るまで、私の好きなものばかりで揃えてくれた。

ヨランダの上の娘で、私の世話係を務めるジョアンは、泣きすぎて腫れあがった私の目を見て、大慌てで氷水を用意して冷タオルで目を冷やしてくれた。私がなかなか泣き止まないせいで、何度も冷たい水に手を浸す羽目になったジョアンの手は、真つ赤になつてしまった。

庭師であるヨランダの夫ダビドは、下の娘のロージーと一緒に、何度も部屋に花を届けてくれた。どれも、亡くなつたお母さまや私が好きだと言つた花ばかり。

他にも、料理人や専属護衛やメイドたちからのお菓子の差し入れや励ましのカード。

たくさんの人たちから慰められ、励まされた。まだ現実を受け止めきれはなかったけれど、こうして泣いていてもしょうがないと思うくらいには気持ちちは落ち着いた。

『ありがとう、皆のお陰で少し元気が出てきたわ』

無理やり浮かべた微笑みに、ヨランダたちは涙を浮かべながらも無言で頷きを返す。

お父さまがあの方たりを連れてきて、十日が経つていた。

そうして久しぶりに部屋の外に出た私だが、早々に廊下でイゼベル——お義母さまと鉢合わせた。

『ヴィオレッタさん。あなたの部屋、この階で一番大きくて日当たりがいいんですつてね。イライザに譲ってもらえないかしら？』

尋ねる口調ではあつたけれど、それは決定事項だった。

『これまで不自由していた姉のためですもの。喜んで譲つてくれるわよね？』

初めは私の部屋が、それからはドレスや装飾品や小物などが、日を経るたびにお姉さまのものになつていく。お父さまはそれを止めずにただ微笑んで見ているだけ。お義母さまに意見した侍女長はクビにされ、翌日にはいなくなつてしまった。

私は、ヨランダたちにお義母さまたちに逆らわないようお願いした。彼女たちまでいなくなつてしまつたらと怖かつたから。

お義母さまたちを屋敷に迎え入れてからひと月ほど経つた頃。

噂を耳にしたのだろう、ハロルド伯父さまが怒り心頭でレオパーファ邸にやってきた。

亡くなつたお母さまの兄で、お母さまの生家であるトムスハット公爵家の現当主でもある伯父さまは、お母さまとも仲がよく、姪の私を可愛がつてくれていた。

『こんなところに可愛い姪を置いておけるか！』

応接室でお父さまを大声でなじり、レオパーファ侯爵家との絶縁と事業提携の終了、そして私を

引き取ると告げたらしい。

らしいというのは、後になってその話を聞いたから。

そう、人伝ひとついでに聞いたのだ。

私はその時、出かけていて屋敷にいなかった。

お父さまの裏切りとしか思えない言動、お義母さまやお姉さまからの執拗な嫌がらせの数々。お母さまの死のショックから立ち直れてもいないのに、ガラリと変わってしまった邸内の雰囲気にならねず、私はお母さまの墓へ花を捧げに行っていた。

二刻後に私を迎えに来ると言い残して伯父さまが去った後、何も知らない私は、ジオンと護衛騎士のジャックスと屋敷に戻り、笑顔のお父さまに出迎えられる。

『おかえり、ヴィオ。待っていたよ』

お父さまの後ろには、陰鬱な面持ちの執事のテーヴと、なぜかずらりと控えている騎士たち。

怪訝な顔をする私に、お父さまは言った。

『トムスハット公爵家との事業取引が今切れてしまうのは困るんだよね。レオパーファはまだ潰せないんだ』

お父さまが何を言っているのか、理解できなかった。

ジオンは騎士たちに連れていかれ、部屋にいるはずのヨランダはおらず、庭にダビドの姿も見えない。そしてロージーも……

『ヴィオ。協力してくれるよね？』

そうして瞬く間に、何も分からないうちに、全てが変わってしまつて。

二刻後、迎えに来た伯父さまに、こう伝えるしかなかった。

『私はこの屋敷から出ることはできません』

お父さまが指示した言葉通り『ここに残りたいです』と言わなかったのは、無力な私の、せめてもの抵抗だった。

すぐ後ろにはお父さまが笑顔で立っていて、私たちのやりとりを見つめている。

愕然とする伯父さまに、理由を伝えることすらできなかった。

「あいたた……」

裏庭の掃き掃除を終えて背を伸ばすと、十八歳とは思えない声が漏れる。早朝から水くみ、洗濯、掃き掃除などずっと屈んでいたせいか、伸ばした腰がずきりと痛む。見上げた初夏の空は、晴れ渡った綺麗な青色だ。朝四つが近い今、少し汗ばむくらいに温度が上がってきている。

日差しを遮ろうと顔の上に手をかざして、ふと指先に視線が向く。水仕事で荒れてかさついた指先は、ところどころ切れて血が滲んでいた。

「……誰が信じるかしら。私が実は、れっきとした侯爵令嬢だなんて」

思わず苦笑が漏れる。擦り切れたお仕着せを着て掃き掃除をしている侯爵令嬢なんて、家名を名乗ったとしても、きつと誰も信じないだろう。

私は真つ青な空を見上げ、溜息をつく。

たった四年、でもあの頃の私とは、状況と立場が劇的に変わってしまった。

お母さまが亡くなって、頼りになる侍女長が解雇され、ヨランダたちと引き離された。その後も、私を庇おうとしたり、陰で手助けするところを見つかったりした使用人たちが何人もクビになっ

ていった。

多くの使用人が入れ替わった今、私に手を差し伸べる者はほぼいない。侯爵令嬢で、嫡女だけけれど、この屋敷で誰よりも軽んじられる存在だ。

「……気づいていなかっただけで、最初から愛されていなかったのよね」

ぼつりと零した言葉が青空の向こうに消えていく。

色々な出来事にショックを受けて、たくさん傷ついた。

でも最も恐ろしく思うのは、誰あろう、お父さまだ。

柔らかな表情、優しい口調、常に浮かべている微笑み、落ち着いた声。

どれもこれもが、記憶にある昔と同じ。

お義母さまやお姉さまが私に何をしても、どんなことを言っても、ついには使用人のような雑事を言いつけ始めた時でさえ、お父さまの笑みは完璧な形を保ったまま崩れなかった。

その微笑みのまま『ヴィオがいい子で嬉しいよ』とのひと言で終わりにされて、ようやく理解する。愛されて大切にされていると信じていた昔も、お父さまの中で私はちっぽけな存在だった。

そう、最初から愛されてなどいなかったのだ。

変わらない微笑みの意味に、私が気づいていたかいないか、違いはそれだけ。

でも、たったそれだけのことがとても悲しかった。お母さまがいた頃の大切な思い出まで踏みこじられたようで、忘れたくないのに、思い出すだけで苦しくなるから。

「おはよう、ヴィオ」

エントランス前を箒で掃いていた私を、仕事に向かうお父さまが通りがかりに見つけ、微笑みながら声をかける。

「今日も朝から頑張っているね。ヴィオは偉いな」

お仕着せを着て働く娘にかける、実の父からの労いの言葉。それに、私はなんと答えるべきなのだろう。

ありがとう、なんて言えるはずもなく、私はただ無言で俯く。

お父さまが不可解で、不気味でたまらない。実の父親であるはずなのに、何を考えているか分からない。嫌がらせをしてくるお義母さまやお姉さまより、よほど怖くて恐ろしい。

今の私の目に、お父さまは怪物としてしか映らなかった。

「今日は外でランチの気分なの。ヴィオレッタ、あんたも付いてらっしゃい」

「……承知しました」

お姉さまからの命令に頭を下げながら、私はお腹をそつと押さえる。

昨夜は食事を取り損ね、朝食食べている途中で呼び出されて仕事を言いつけられ、かなりお腹が空いていた。

レストランに行くとき声をかけられたが、一緒に食事の席に着くという意味ではない。

お姉さまの席の後ろで控えているということだ。途中でお腹が鳴らないよう心の中で祈りながら、後を付いていく。

「ねえ、ちょっと。あそこの焼き菓子を買ってきてちょうだい」

何事もなく食事を終え、安堵しながらレストランを出たところで、お姉さまは足を止め、背後に控える私に言った。

お姉さまが指さしたのは、同じ通りにある菓子店。

人気の店らしく、かなり長い列ができています。

「私はブティックに行ってくるわ。買い物している間に、馬車の停め場に戻ってきなさい。出発する時にあんたがいなかったら、そのまま置いていくわよ」

「……はい」

初夏の昼過ぎ、日差しはかなり強くなっていた。半刻近く並んでようやく買った菓子の入った箱を手に、急いで馬車の停め場に戻る。

「馬車がないわ……」

お姉さまはいつもたくさん買い物をするから、きつと間に合うと思っていたのに、停め場周辺にレオパーファ家の紋章が付いた馬車はどこにもない。

「歩くしかなさそうね。でも、どっちに行ったらいいのかしら……」

私はきよろきよろと辺りを見回す。

レオパーファ邸はどちらなのか。普段はずっと屋敷内で働いていて、今日みたいなことでもない限り外に出る機会はない。

方角が分からず、どちらに向かったらいいのか途方に暮れる。

「あ……」

道の向こうに巡回中のふたりの騎士を見つけ、そちらに足を向ける。

帰り道が分からないなんて子どもみたいで恥ずかしいけれど、長い黒髪をひとつにまとめ、青のリボンで結んだ騎士は親切に帰り方を教えてくれた。

彼は最後にこう付け加える。

「行き方は難しくはありませんが、徒歩では一刻半ほどかかります。可能なら馬車の利用をおすすめします」

「……ありがとうございます。せっかくですが、歩いて帰ることにします」

空腹だし、少し眩暈もするから、私としても馬車で帰りたい。

でも、持っているのは菓子代のおつりだけ。屋敷に戻ったら返さないといけないお金に手を付けるわけにはいかない。

ふたりにお礼を言っ、教えられた方角に向かって歩き始める。きつとお姉さまが屋敷で待ち構えている、早く帰らなくては。

けれど歩き出してまもなく、頭がずきりと痛み始める。日差しに長くさらされたせいだろうか。体がだるい。視界がぐにやりと歪む。

——喉がからからだわ。

スープを食べている途中で呼ばれ、床の拭き掃除をした。その後すぐにお姉さまに昼食のお供に連れ出されたから、水もお茶も飲めていない。

頭痛はどんどんひどくなり、足が鉛のように重い。

額や背中に冷たい汗が流れ落ち、暑いのに寒いような妙な感覚に、これはまずいと感じ、どこか日陰で休もうと足を止めて周りを見回す。

その時、ぐらりと視界が回転した。

——倒れてしまう。

足元の石畳が目に入る。

このままでは石畳に体を打ちつけてしまうだろう。

それが予想できるのに、体に力が入らず何も反応できない。迫る石畳に、私はぎゅっと目を瞑る。衝撃を覚悟して、けれどそれとは裏腹に、ふわりと包まれる感覚が訪れる。

「……大丈夫ですか？」

——え？

驚いて反射的に目を開ける。

すぐ目の前に、さつき道を尋ねた騎士がいる。

漆黒の髪と、紅玉ルビのように綺麗な瞳の騎士。

もうとつくに他の場所に向かったかと思っていたのに。

急いで駆け寄ったのか、少しだけ息が荒い騎士は、心配そうに私をじっと見つめている。

——この方が助けてくれたのね。

お礼を言っ、大丈夫です、心配ありませんって伝えなくちゃ……



そう思ったのに、体力の限界が来ていたようで、意識はそこでふつりと途切れてしまった。



王都の巡回警備の任に就いていた僕——ランスロット・バームガウラスは、目の前の状況にどう対応すべきか、忙しく思考を巡らせていた。

当初はただの道案内、後に救助活動に移った僕の任務対象は、どうやら複雑な事情を抱えているようだったから。

武の名門であるバームガウラス公爵家の嫡男に生まれた僕は、本来は十二歳で王国騎士団に入る予定が、急な爵位継承で時期が遅れて十四歳で入団。

それから六年、騎士見習いから準騎士、平騎士、班長、隊長と順調に昇進を遂げ、最近は新人指導を兼ねた王都の巡回警備を担当していた。

騎士見習いから昇格したばかりの準騎士とペアを組み、一緒に街中を巡回しながら、迷子の保護、道案内、軽犯罪の取り締まり、喧嘩の仲裁や不審人物の警戒などの事案に対応して、新人に経験を積ませる。

午前中は大きな事案もなく終わり、昼休憩を取った後、迷子やスリなどにちよこちよこ対応しながら二刻ほど過ぎた頃、僕はお仕着せ姿の少女を保護した。

その少女からはレオパーファ邸への行き方を尋ねられ、つい先ほど説明したばかり。

顔色の悪さを心配して馬車を勧めるも、おそらく持ち合わせの問題だろう、彼女は徒歩を選ぶが、少しの距離を進んで、ぐらりと体が大きく傾いた。

「危ない……っ！」

僕は咄嗟に駆け出した。

幸いにも、少女が石畳に体を打ちつける前に、なんとか体を支えることができてほっと安堵する。しかし、一度は目を開けたものの、少女は今や完全に気を失っていた。

周囲を見回しながら考える。とりあえず木陰に運ぶか、それとも街の医院に連れていくか。

いや、ここからなら騎士団詰所の医務室のほうが近いと思いついて抱き上げた時、視界に見知らぬ男の姿が映る。

「……っ、お嬢さま！」

こちらに向かつて早足で歩み寄る男。その声に滲む焦りと勢い、そして発した言葉に驚く。

男の視線は、腕の中で気を失っている娘——やせ細り、使い古した紺のお仕着せ姿の少女に向いている。

男が着る騎士服の胸元には、レオパーファの家紋を象る薄緑の刺繍。

その彼が『お嬢さま』と呼ぶのであれば、僕が今抱きかかえている少女はレオパーファ侯爵家のご令嬢ということになる。

確かに、彼女が僕に尋ねたのは、レオパーファ邸への行き方ではあった。

しかし、僕が知るレオパーファ侯爵令嬢はこの少女ではない。その令嬢がデビューして以降、夜

会で会うたびに追いかけて回されているから間違えようがない。

家の事情により十二歳で爵位を継ぎ、若くして公爵家当主となった僕は現在二十歳。未だ婚約者を決めていない身は令嬢たちの格好の相手に見えるらしく、全く嬉しくないが、夜会や茶会でよく囲まれたり追いかけられたりする。

そんな中でも、レオパーファ家の令嬢のマナーの悪さと非常識なまでのしつこさ、そして教養のなさば飛び抜けていた。あまりのひどさに思わず家名を確認し、意外にも高位貴族であることに驚いたのだ。

——ではこの少女は、あのとんでもない令嬢の妹だというのか……？

青白い顔を見下ろすが、髪色も顔立ちも似ているところはひとつもない。お仕着せ姿と相まって、『お嬢さま』という言葉が本当なのかと疑問が湧く。

今日の巡回で組んでいる新人騎士のトマスも、僕と同様、男の言葉に困惑しているのが見てとれた。

レオパーファ家の騎士服を着た男が、やや早口に問いかける。

「お倒れになったのですか？ あの、お嬢さまに何が……」

「……トマス、身元確認」

彼から一歩下がって距離を取り、新人騎士に短く指示する。トマスははっと我に返り、間に入ってきてきびと質問を始めた。

素直に応じた男はジャックスと名乗り、レオパーファ侯爵家に仕える騎士だと続けた後、少女が

お仕着せを着てはいるが正真正銘の侯爵令嬢で、名前はヴィオレッタであると言った。

買いたくはないが、異母姉がわざと置き去りにしたが、少女は屋敷からあまり出ないため、帰り道が分からず困っているのではないかと心配になり、こっそり抜け出してきたらしい。

とりあえず買いたくはないが、命じられた店に向かおうとしていたところを、倒れた彼女を抱える僕と遭遇したというわけだ。

「大変申し訳ないのですが、このままお嬢さまを医者のもとに連れて行っていただくことは可能でしょうか。俺が連れて帰るのは少々問題がありまして……。それに、連れて帰っても、屋敷で医者に診てもらえるとは思えませんので」

「……元より医者に診せるつもりでいたから、それは構わないが」

ジャックスのひどく真剣な表情と含みのある言葉に、内心で推測を重ねる。

トマスに指示を出し、詰所の医務室へ連絡に走らせる。令嬢と判明した以上、負傷した騎士たちと同じ部屋で休ませるわけにはいかない。

「……お仕着せ姿でいる理由はなんだ？ それに、ずいぶんと痩せているし、手も荒れている。レオパーファ侯爵家が困窮しているという噂は聞いたことがないが」

詰所に向かう道すがら、隣を歩くジャックスに説明を求める。

数年前までヴィオレッタ嬢の専属護衛だったという彼は、今はあの礼儀知らずのイライザ嬢付きとなっていて、今日ヴィオレッタ嬢が置き去りにされる場面にも居合わせていた。屋敷に戻って護衛交代のタイミングで抜け出し、おそらく帰り道が分からなくて困っているであろうヴィオレッタ

嬢を助けようと考えた。少し距離を置いて誘導するなど、一緒にいるところを見られなければ大丈夫だろうと。

「……仕える家のご令嬢を助けるのに、なぜそもそもコソコソする必要が？」

「俺が話せることは限られていますけど……」

おおよその見当はつくが、思い込みで判断するのはよくないとあえて尋ねれば、ジャックスはさう前置きした上で話し始めた。

ヴィオレッタ嬢の実母の死去。時を置かずしての再婚と、ほぼ同時に始まったヴィオレッタ嬢への虐待。そして実父である侯爵の無関心。また、一般的には連れ子と思われているイライザ嬢が、実は侯爵の娘であること。

「……なるほど。今の夫人は、結婚前からの愛人だったというわけか」

少しばかり僕の実の父親を彷彿とさせる話に、自然と眉間に皺が寄る。不誠実な男の存在には、本当にうんざりする。

だが、一方で聞いた話に納得もした。社交でのイライザ嬢の服装は、後妻の夫人である母と揃って露出が多く、品や慎みなど欠片もない。加えて、マナーは拙いにもかかわらず自信満々で、自分に非がある可能性など微塵も考えない。それらが全て、イライザ嬢が連れ子ではなく侯爵の実子で、しかも愛されている自覚からであるなら頷ける。

レオパーファ侯爵自身は品性ある装いをしているし、社交の場での言動も高位貴族として真つ当だが、妻子の服装や行動には無頓着。当然ながら、再婚してからレオパーファ侯爵家の評判はかな

り落ちたが、それすら気にしているように見えないのは、愛人だった後妻への愛で目が曇っている
ということか。

「……ヴィオレッタ嬢のデビュタントは……」

「……されておりません。デビュタントの年は、王家に病気で欠席と連絡して、ずっとそのま
ま……」

社交場で一度も会っていないから分かり切ったことではあったが、小柄な体に、もしかしたらこ
れからの場合もあると思って聞いてみた。しかし、ジャックスは苦い表情で首を横に振る。そうか、
デビュタントすら無視されたのか。

「ヴィオレッタ嬢の母君の生家は、この状況をどう見ているのだ？ 黙認しているのか？」

僕の問いに、ジャックスは悲しげに眉尻を下げる。

「決してそのようなことはありませんが……好奇心からのご質問はここまでとさせていただきます。こ
れ以上の詮索は、かえってお嬢さまの苦境を招きかねませんので」

タイミングがいいのか悪いのか、ここでちょうど話所に到着となる。

こっそり抜け出してきた彼にレオパーファ侯爵家への伝言を頼むわけにはいかず、ヴィオレッタ
嬢の保護については騎士団から連絡を入れると伝えれば、ジャックスは安堵の表情を浮かべ、何度
も頭を下げるのだった。

「これ以上の詮索はかえってヴィオレッタ嬢の苦境を招く、か……」

ヴィオレッタ嬢を医者に託し、診察と治療を任せている間、僕はジャックスの最後の言葉の意味
を考えていた。

あの口ぶりでは、母君の生家が動いていないわけではないのだろう。ならば、ヴィオレッタ嬢が
何者かに脅迫の盾として利用され、表立って助け出せないということだろうか……？ いや、もし
や陰で何らかの対抗手段を取ろうとしているのなら……

「……それなら、確かに、ただの好奇心で口出しされては困るだろうな」

「ああ、バームガウラス隊長、よろしいですか」

開けたままの扉の向こうから、医者が僕を呼ぶ。

「処置が終わりました。軽い脱水症状ですね。あと栄養状態が悪い。彼女が働いているのは、使用
人への待遇があまりよくない家のようですね」

「いや、彼女は……」

「はい？」

使用人ではない、と言いかけて口を嚙む。ここは誤解させたままのほうがいいだろう。まさしく
余計な詮索を生みそうだ。

「なんでもない。あとは僕がやるから、医務室に戻って大丈夫だ。対応してくれて助かった。街の
医者よりこのほうが近くてね」

「いえ、ちょうど手が空いていたので問題ありません。それでは私は医務室に戻りますね」

そう言って、医者はヴィオレッタ嬢のために用意した別室から去って行った。

額の上に冷タオルを乗せて眠る彼女の顔色は、まだ青白い。

細い腕、傷だらけの指先。抱き上げた体はひどく軽く、折れてしまいそうなほどに華奢だった。

艶を失くした金色の髪は、きちんと手入れをしたらさぞ美しく輝くのだろう。頬はこけ、肌はかさついているが、整った顔立ちには気品が漂っている。

僕に道案内を頼んだ時の言葉遣いは丁寧で、お辞儀などの所作も綺麗だった。

それでも、ジャックスから話を聞いていなかったら、僕は目を覚ましたヴィオレッタ嬢を使用者として接していただろう。それはきっと、彼女の心をひどく傷つけるはず。

「……不甲斐ないな」

レオパーファ侯爵家の本当の家族構成、彼らの家で起きている異常に気づかなかつた。

十二歳で爵位を継いだ時、お披露目に備えて貴族年鑑をひと通り記憶した。

当時、レオパーファ侯爵の妻は確かエリザベス夫人で、成人前の子どもの名は記載しないため、娘がひとりだけ覚えていた。

貴族年鑑は五年に一度更新され、最新版は昨年。少なくともそれには、今のレオパーファ侯爵家の家族構成が記されていたはず。

しかし社交に慣れてきたのと、公爵としての執務と騎士の仕事の両立に忙しいのとで、確認を怠っていた。十二歳の時の記憶のままでは穴が生じて当然なのに。

「……本当に不甲斐ない」

もう一度、同じ言葉を繰り返す。情けなくも、僕は今が幸せなことに満足していた。

だが落ち込み、反省するだけでは意味がない。

僕はもう彼女の苦境に気がついてしまった。

好奇心からの詮索ではヴィオレッタ嬢の苦境を招くというのなら、僕はそれ以上を——そう、彼女の解放を、レオパーファ侯爵家の異常が正されることを心の底から願おうと思う。

第二章 ただの同情、それとも

『じゃあね、リズ、ヴィオ。仕事に行ってくるよ』

お父さまが、私とお母さまに向かつて手を振っている。

怪物だと気づく前の、私が信じていた頃のお父さまが。

手を振り返すお母さまと私の後ろに控えているのは、大好きなヨランダとジオアン。

庭で花の手入れをしているダビドが見える。ロージーがその近くで走り回っている。

ああ、夢の中にいるのだわ——そう瞬時に悟った。

だって皆、もう私の側にいるはずのない人たちばかり。

夢の中の私は、大好きな人たちに囲まれて幸せそうに笑っている。不安や怖れなど微塵もない、

無邪気で明るい笑顔。眩しくて、懐かしくて、悲しくて——苦しい。

この頃の私は、何も知らないのだ。

お父さまは、仕事と称してあの人の^{イゼベル}のもとに行っているのよ。

私よりひとつ年上の娘まで生まれているの。

お母さまが亡くなったら、ろくに死を悼むこともせずに、すぐふたりを屋敷に連れてくるわ。

そうしてお父さまは、あの家に私を縛りつけておくためにヨランダたちを人質に取るの。

そんな私の呟きに呼応するように、夢の中の私の周りから、ひとり、またひとりと大好きな人が消えていく。最後にふっとロージーの姿が消えて、現実と同じ、私はひとりぼっちで屋敷のアントランスに佇んでいる。

「会い……た、い……」

ひとり残され、心細くてたまらない。生まれ育った家のはずなのに、恐ろしく感じるなんてどうかしている。いつそ逃げ出してしまいたいのに、それは叶わなくて。

「……誰に会いたいのですか？」

心細さに震えていたら、どこからか声が聞こえた。中低音の柔らかな男の人の声。

誰だろう、知らない声だ。でも、口調が優しいせいとか、怖さも不安も感じない。むしろ安堵さえ

覚える声に、私の唇は素直に答えを口にする。

「……大好きな……人たちが……いなくなってしまったの……」

「いなくなつた？ それはどうして……？」

「連れて、行かれちゃつ……たの……どこにいるか……分らない……」

「連れていかれた……？」

声に若干の硬さが混じる。そうよね、人を連れ去るなんて、おかしいわよね。

「会いたい……」

「……大丈夫、いつかきつと……」

左手が温もりに包まれる。手を握られたと分かる。

久しぶりの温もりがひどく懐かしく、嬉しい。その温かさに泣きたくなる。

でも安心しては駄目。『いつか』なんて日は、いつ来るかも分からない。

もしかしたら、永遠に来ないかもしれない。ああ、でもそうだとしたら。

「もう、二度と……会えな……」

「……僕が、見つけます」

無理よ。だって、隠したのは怪物おんごさまだもの。

私がレオパーファ邸で静かに暮らしていれば、それ以上ひどいことにはならないと言っていたわ。だから、だから私は――

「大丈夫です。必ず見つけると約束します。だから、どうか今は安心して休んでください」

「約束」と言った時、私の左手を包むごつごつした手に、きゅつと力がこもった。その力強さに勇気づけられる。もしかしたら、と思ってしまう。

「やく、そく……?」

「はい、約束です」

なんの保証もない、ただ言葉だけのやりとり。声の主が誰かも分からない。

なのに、なぜか私はその約束に途方もない安堵を覚え、自然と微笑んでいた。

「ありが……と……」

そして、私の意識は再び闇へ沈んでいく。

「ん……」

久しぶりにぐっすり眠った気がする。倦怠感のない目覚めなんて、いつ以来だろう。

そんなことを考えながら瞼を開き、目に入った見知らぬ模様の天井に一気に目が覚める。

「ここは……」

ぱちぱちと目を瞬かせ、もう一度天井を見上げるが、やっぱり知らない模様。ここはどこ?

「目が覚めたのですね。ご気分はいかがですか」

「ひゃあっ?」

近くから聞こえた声に驚いて、反射的に変な声を上げてしまう。

恐々と隣に視線を向けると、騎士服を着た黒髪の男性が申し訳なさそうに眉尻を下げている。

「あなたは……」

その顔に覚えがあった。家への道を教えてくれた巡回の騎士、私が倒れた時に抱きとめてくれた親切な人だ。

「失礼。驚かせるつもりはなかったのですが」

「あ、いえ、そんな……私こそ大袈裟に驚いてしまってます……」

「僕はランスロット・バームガウラスと申します。王国騎士団に所属する騎士です。今日は偶然、ご令嬢が倒れるところに遭遇し、こちらに運ばせていただきました」

バームガウラス――その家名に、思わず背筋が伸びる。

十四歳まで後継者教育を受けていた私は、授業の一環で主要貴族家の名前を全て、貴族年鑑を見

ながら覚えていた。

騎士を多く輩出する武門の家、バームガウラス。確か、当時最新の貴族年鑑で、すごく若い当主が爵位を継承したと知って驚いたのだ。

もしかして、この黒髪の騎士が、現バームガウラス公爵家当主……？

「あの、た、大変ご迷惑をおかけしました。申し訳ありません……っ」

「全然迷惑などではありませんから、ご安心ください。ああ、ちよつと失礼」

慌てて起き上がるうとした私を制止すると、ランスロットさまは開いたままの扉の向こうに声をかけ、現れた別の騎士に何事かを指示し始める。報告か何かだろうか、その騎士は頷いて、すぐに部屋から出ていった。

ランスロットさまはベッド脇に椅子を持ってきて座ると、ここが貴族街の中央区にある騎士団の詰所であると説明した。巡回などの城外の任に就いている騎士たちが、休憩所もしくは待機所として使う建物らしい。

小規模ながら、仮眠室や食堂やシャワー室、地下には犯罪者を一時勾留する牢屋まで備えていて、医者も常駐する。もちろん騎士の負傷などに対応するための医者だけれど、今回は倒れた私を診察してくれたそうだ。

「街の医院より、こちらのほうが位置的に近かったのだ」

指で頬をかきながら、そう話すランスロットさま。

道を聞いただけの私に示す配慮と気遣いに、長く家族から冷たい扱いを受けているせいだろうか、

ありがたくて嬉しくて、胸がじわりと温かくなる。

「あの、私はどのくらい眠っていたのでしょうか」

「そうですね。一刻ほどでしょうか」

一刻——その言葉に私はさっと青ざめる。

それでは、もうとうに昼八つを過ぎているではないか。

これから歩いて帰って、さらに一刻と半。もしお父さまが戻ってこない私を『逃げた』と判断したら……

慌ててベッドから出ようとすると私を、ランスロットさまが「大丈夫ですよ」と止める。

「レオパーファ侯爵家には騎士団から連絡を入れました。巡回中にあなたが倒れたところに遭遇したので、意識が戻るまで医務室で休ませると。ですからどうぞ心配なく、ヴィオレッタ嬢」

私は一瞬呆気にとられたもののほつと安堵して、けれどその後首をかしげる。

いちいち保護した先の家に使いを出すなんて、そんなに丁寧に対応していたら騎士団の仕事に差し障るのではないかしら。いえ、それよりも気になるのは。

「あの、どうしてご存知なのでしょう……？」

「連絡をレオパーファ侯爵家にしたことでしょうか。それでしたら、倒れる前に行き方を私にお尋ねになったので。お名前は、ジャックスという騎士から聞きました」

「ジャックス……」

「ええ。街中に置いていかれたのが心配で、捜しに来たそうです。意識を失ったあなたを見て、た

いそう慌てていましたよ」

「そうですか。ジャックスが私を……」

ジャックスは元々トムスハット公爵家に仕えていて、お母さまの輿入れの際についてきた三人の騎士たちのひとりだった。

その三人も、ひとりはお義母さまが来たばかりの頃に私の待遇について苦言を呈したせいで、もうひとりはお姉さまから私を庇ったことで解雇され、今も侯爵家に残っているのはジャックスだけだ。

トムスハット公爵家と繋がりのあるジャックスは、ハロルド伯父さまとの連絡役も務めている貴重な存在で、普段はお義母様たちから目をつけられないように、私との表向きの接触を避けている。けれどあまりに大変な時には、陰でこっそり手を貸してくれるのだ。きつと、今日もそれで来てくれたに違いない。

「お義母さまたちに知られたら、何を言われるか分からないのに……」

「彼もそう言っていました。こっそり道案内をするつもりだったようですが、ヴィオレッタ嬢が倒れてしまったので、まずはあなたを医者に診せることで話がまとまったのです。家名が分かった経緯を伝えれば、騎士団から連絡が行っても、あちらは納得するでしょうから」

「……お気遣いに感謝します」

ランスロットさまの説明に胸を撫でおろしたところで、先ほどの騎士が戻ってきた。そして、手に持っていた覆いのかかったトレイをランスロットさまに渡す。

覆いを外すと、水差しとコップ、それにサンドイッチなどの軽食が載っている。

今から食事なのかしらと眺めていると、ベッド脇の小さな丸テーブルの上にそれを置いたランスロットさまが振り返った。

「どうぞお召し上がりください」

「……え？」

首をかしげる私に、ランスロットさまは言葉が続ける。

「診察の結果、ヴィオレッタ嬢には栄養失調と、軽い脱水症状が見られるとのことでした。それで勝手ながら、簡単につまめるものを用意しました。体力がかなり落ちています。家に戻ってまた倒れでもしたら大変ですので、軽く召し上がっていただく下さい」

栄養失調と脱水症状、どちらも心当たりがあるけれど、騎士団の詰所まで運んでもらった上に、診察してもらい、さらには食事までとなると、流石に申し訳なさすぎる。

「いえ、あの、そんな、ここまでしていただくわけには……」

きゅるるるるる……

「あ……っ」

遠慮しようとした瞬間、意思に反してお腹が大きく主張する。慌てて両手でお腹を押さえたけれど、既にしっかりと聞かれてしまった。

なぜこのタイミングで。とつても、非常に恥ずかしい。

鏡など見なくても分かる、きつと私の顔は真っ赤になっているはずだ。

どうして、よりによってランスロットさまの前でお腹が鳴るの。こんなことなら、レストランでお姉さまや他の客がいる前で鳴ったほうがよほど耐えられる。

「いつそ知らない振りをしたい……そう思いつつ、私は謝罪するべく口を開く。恥ずかしいから俯いたままでいるのは許してほしい。」

「……はしたない姿を、申し訳ございません……」

昨夜は夕食抜きだったとか、朝はスープを飲みかけで呼び出されたとか、言い訳なら山ほどあるけれど、そんな見苦しいことはしたくない。だから謝罪の言葉だけを口にする。

それが、名ばかりだとしても侯爵令嬢である私、ヴィオレッタのせめてもの矜持だから。

「ふふ、お可愛いらしい音ですね。僕とは大違いです。僕の腹は雷のようなとんでもない音を出すのですよ」

「え……?」

ランスロットさまの声に蔑みの響きがないことに驚いて、そろりと顔を上げてみる。私に向けるランスロットさまの眼差しは、とても、とても優しいもの。

「実は、僕の母はいつも、僕がよそで盛大に腹を鳴らすのではないかと、戦々恐々としているのです。落雷と間違えられたら皆が慌てて避難を始めてしまうかも、なんて本気で心配するのですよ。なんとも情けない話だと思いませんか」

「まあ……」

「ヴィオレッタ嬢が僕の腹の音を聞いても、驚いて逃げ出さなideくれるといいのですが。これは

かりは実際に聞いてからでないかと分かりませんね」

「そんな、逃げるだなんてありえせんわ」

ランスロットさまの軽口に、恥ずかしさで張りつめていた心がすつとほどける。心遣いがありがたくて、今度は違う意味で泣きそうだ。

「水差しに入っているのは果汁入りの水です。今注ぎますね」

「いえ、ランスロットさまに使用人のような真似をさせるわけには……」

「ヴィオレッタ嬢が目覚ましたら、まず水分補給をさせるようにと医者からきつく言われてます。遠慮されると、あとで僕が怒られてしまうのです。僕を助けると思っただけ飲んでください」

騎士かつ公爵家当主のランスロットさまに給仕させるなんてとんでもないことだけれど、満面の笑みで押し切られる。

渡された果汁入りの冷たい水はとても美味しく、喉が渴いていたせいか一気に飲み干してしまう。ランスロットさまがまたグラスに注いでくれると、それもすぐになくなった。

三杯目になって、ようやく喉の渇きが治まると、今度は軽食が載った皿を差し出される。

面前で盛大にお腹を鳴らしてしまっただけでは、やせ我慢はみつともなさを晒すだけ。それに、帰りが遅れた私は、きつと今夜の夕食を抜かれるだろう。素直に軽食に手を伸ばす。

「帰りは騎士団の馬車で送りますので、慌てずゆっくり食べてください。そして食べながらで構いません。ヴィオレッタ嬢に教えていただきたいことがあるのです」

そう言うと、ランスロットさまは笑みを消し、ひどく真面目な表情で私を見た。

「ジャックスから、侯爵家における今のあなたの立場を簡単に教えてもらいました。と言っても、侯爵の再婚など、貴族年鑑などを見ればすぐに分かる表向きあかしの情報ばかりです。主の許可なしに勝手に詳細を話すわけにはいかないと、詳しい説明は断られましたので」

「え……」

「ヴィオレッタ嬢から詳しい事情を伺いたいが、今はそれだけの時間はないでしょう。また別の機会に……と言いたいところですが、僕が思うに、あなたの行動には制限がかけられている。今日のような機会がまた得られるとも思えません。だから今、これだけは伝えておきたい」

ランスロットさまは、私を真つ直ぐに見つめながら言葉を続けた。

「……僕はあなたの力になりたい。どうしたら、あの家からあなたを救い出せるでしょうか？」

予想外の言葉に、向けられた真剣な眼差しに、私は言葉を失ったのだった。

「騎士団の移動用馬車がありますから、それでレオパーファ邸の近くまで送りましょう」

ランスロットさまに最初から最後までお世話になりっぱなしで心底申し訳ないと思いつつも、まだ体に怠さが残る私にとってその申し出はありがたいものだった。

徒歩よりずっと早く帰れるというのも大きい。いくら連絡が行っているとはいえ、あまり遅くなりすぎては危険だから。

次に会う機会はどうそうないでしょうから、と言って、ランスロットさまは馬車にも同乗し、時間の許す限り聞き取りを続けた。

会う機会はそうそうない。

——その通りと思いつつ、言いようのない寂しさが胸に宿る。

ガタンゴトンと揺れる馬車の中、ランスロットさまと向かい合って話す時間があまりに穏やかで、この上なく貴重で大切なものに思えた。

馬車がレオパーファ侯爵家の近くで止まったらこの時間は終わり。永遠に着かなければいいのに、なんて詮のない考えまでよぎってしまう。

駄目ね。誰かに優しくされることなんてもうずっとなかったから、心が簡単に揺らいでしまう。どうしてこんなに親身になってくれるのか、と戸惑いはある。

きっと、侯爵令嬢でありながら使用人のように扱われ、栄養不足で路上で倒れた私を哀れに思っ
て見過ごせないのだろう。

騎士としての責任感と正義感、そう考えれば納得できた。

レオパーファ邸が見えてきたタイミングで、ランスロットさまが御者台に面している壁を叩く。それを合図に、馬車のスピードが落ち、ゆっくりと止まる。

「この辺りなら、降りるところを屋敷の者に見られずに済むでしょう」

「……本当に色々ありがとうございます」

私は最後に深々と頭を下げ、立ち上がる。

「ヴィオレッタ嬢」

馬車から降りた私に、ランスロットさまが口を開く。

「次にいつ会えるか分かりません。先ほども申し上げた通り、機会は少ないでしょうから。ですが会えない間も、あなたとの約束を果たすべく全力を尽くします。僕を信じて待っていてください。辛くても、どうか諦めないで」

「……ありがとうございます」

ゆっくりと馬車が走り出し、私もレオパーファ邸に向かって歩き出す。夕焼けを背負って黒く佇む屋敷が、いつも以上に大きく見える。

怖くて憂鬱でたまらない。

ああ、いつこのまま逃げ出せたら、とさえ思ってしまう。駄目よ、ここで逃げたら何もかもが台無しになるわ。

『僕を信じて待っていてください。辛くても、どうか諦めないで』

先ほどのランスロットさまの言葉を思い出し、心を奮い立たせる。

前を向いて、足を進める。一歩進むごとに、レオパーファ邸が大きくなっていく。

私の姿を門番が見つけ、屋敷に知らせに走った。

お父さまがまだ仕事から戻っていないのは幸いだった。でも、帰宅を聞きつけたお義母さまとお姉さまにリビングに呼び出され、叱責される。

「道端でみっともなく倒れたんですってね。お使いすらまともにできないのかしら。本当に駄目な子ね」

「そうよ。お母さまと一緒に食べようと思って、楽しみにしていたのに」

「……申し訳ありません」

「罰として今日は夕食抜きよ」

「それがいいわ。あなたのせいで焼き菓子を食べ損ねたんだから」

予想通りの罰が下るが、ランスロットさまの気遣いのお陰で今日のダメージはそう大きくない。

お腹が空きすぎて眠れないなんて心配も、今夜ばかりはしなくて済みそうだ。

「ふう……」

食器洗いや片付けなどの仕事を終え、使用人棟にある自分の部屋に戻る。

後ろ手に扉を閉めると緊張が解け、知らず詰めていた息を吐いていた。

心がいつもより軽い理由は明らかだ。

思わぬところで受けた気遣いが、必ず助けるというランスロットさまとの約束が、私に力を与えてくれる。

——ああ、私、とても疲れていたのね。

ハロルド伯父さまが私のために怒っている。ジャックスのように密かに私に味方してくれる人もいる。ヨランダたちも耐えている。

だから私も、と思って気を張って、張り続けて。

でもやっぱり、ここにひとり取り残され、どうしようもなく心も体も疲弊してしまっていた。

「ランスロットさま……」

思いがけない出会いだった。道を聞いたのが始まりの、重なった偶然の上に交わした約束。闇夜のように漆黒の髪色をした、寶石のように赤い瞳の騎士。

小さい頃、何度も読んだ物語の英雄と同じ名前。その名の通り、立派で優しく、気遣いにあふれる人だった。

路上で意識を失った時、ランスロットさまが近くにいなかったらどうなっていただろう。

石畳に体を打ちつけて動けなくなっていたら。連絡もできないまま、なかなかレオパーファ邸に戻れなかったら。お父さまから『逃げた』と見なされていたら……

浮かぶ最悪の予想に、私はぎゅっと手を握りしめる。

「……ヨランダ」

会いたくてたまらない人たちの顔が脳裏に浮かぶ。

「ジョアン……ロージー……ダビド……」

私をこの屋敷に留め置くためだけに、連れていかれた家族。

あの家族に何かあったら、私は一生自分を許せない。

「……大丈夫、ハロルド伯父さまにランスロットさまのご助力が加わったら、きっとすぐよ。もうすぐ、皆を……」

祈りのように私は呟く。

この四年間、いつか先行きが明るくなると願いながら辛い日々をやり過ごしてきた。いつか、いつかと。

それは言い聞かせにも似ていた。

そうして気持ちをなんとか取り繕い、朝が来るたびに私はまた起き上がったのだ。もはや習慣となった祈りを、私は今夜も小声で呟いてからベッドにもぐる。

大丈夫、きっともうすぐ、と。

「シユテルフェン騎士団長、ランスロットです」

王都の巡回警護の任を終え、王城の騎士団棟に戻った僕は、真つ直ぐに団長室に向かう。許可の声を待つて中に入ると、執務用の机の前に座る騎士団長が笑顔で僕を迎える。

「今日の任務は終わったんだらう？ 堅苦しい言い方は終わりにして、いつものように呼んでくれ、ランス」

「……はい、義父上」

朱色の髪を揺らし、琥珀色の目を柔らかく細める高身長男性は、キンバリー・シユテルフェン。穏やかな雰囲気をもとうが、王国騎士団長で、そして僕の義理の父親だ。少々ややこしいが、かつては叔父上と呼んでいた人。

僕の実父——ヘンドリックは、母上との結婚後、愛人の家に入り浸ってバームガウラスの屋敷に寄りつかなかったという、実に不名誉な実績の持ち主である。

実際、実父との初対面は、僕が十二歳になる少し前で、その時もちゃんとした会話はしていない。そんな実父の不在を補うべく、屋敷の離れに住んで母上をあれこれ助けたのが、祖父母と叔父上の三人だった。

母上、祖父上、祖母上、そして叔父上に囲まれ、たつぷり手間と愛情をかけられて育った自覚がある僕は、肖像画でしか見たことがない実父の不在を寂しく思う暇などなかった。何を隠そう、幼い頃は叔父上を実父と勘違いしていたくらいだ。

世では英雄と称えられていた実父だが、僕の人生には完全に不要でしかなく、早く母上を自由にしてほしいと密かに願うほどだった。

そして、その願いが叶ったのは八年前。突然屋敷にやってきた実父は母上に離縁を言い渡し、いつの間にか愛人と王都を出ていった。

けれど、それですぐに母上と叔父上が再婚、とはならなかった。

なぜなら、自惚れでなく母上はとにかく僕が大事で、僕の幸せばかり考えているから。

長く好意を寄せてきた叔父上には申し訳ないが、母上は叔父上のことなど全く眼中になかったのだ。

加えて、実父との中身のない結婚生活の影響か、母上には恋愛感情への忌避感があったようにも思う。

叔父上は頑張ってアプローチするものの、固い殻で覆われた母上の心にはなかなか届かない。叔父上は無理を通すタイプではないし、このまま母上の気持ちを尊重して身を引くのではないかと、むしろ僕のほうがハラハラした。

実際、その通りになりかけたけれど、そこでようやくふたりの気持ちが通じ合い、結婚に至る。そうして僕の育ての父であった叔父上は、嬉しいことに戸籍上でも父となった。

義父上は騎士爵を持っていたが、結婚祝いでバームガウラス公爵家が持つ爵位のひとつ、シュテルフェン伯爵位を譲った。母上を守るためにも爵位は少しでも高いほうがいいから。

その後、ふたりの間に可愛らしい女の子——妹のミルドレッドが生まれる。ならば小さくても領地があるほうがいいだろうと、今度は祝儀として小さい領地を贈った。

家名や爵位が別になっても、広いバームガウラス邸に僕ひとりを残すのは心配だったらしく、義父上と母上は結婚しても別の屋敷を構えなかった。それは祖父母も同じで、今も離れで暮らし、僕たちを見守ってくれている。

僕が結婚した暁には、祖父母は領地に移って隠居生活を、そして義父上たちは別の場所に屋敷を構えると言っているが、どうやら実父の言動が僕の結婚観に密かに影響を及ぼしているようで、未だ婚約者の候補すら決められずにいる。

公爵家当主としていつかは、と覚悟はしているけれど。

「義父上」

昔も今も、困った時に一番頼りになる人。だから僕は、本日の任務を終えて真っ先にここに来た。「実は、折り入って相談したいことができてまして」

僕の言葉に、義父上がうん？ と首をかしげる。

「日報とは別に報告を上げるような件でもあったのかい？」

たゆまぬ努力とひたむきな訓練で剣の腕を鍛え上げ、英雄と称えられた天才剣士の^{（ハネリッヅ）}実父に勝利し、騎士団長の座を手にした義父上は、長年の経験で察するものがあるらしい。柔らかな笑みを向ける

と、組んだ手に顎を乗せ、話を聞く姿勢を取る。

勤務時間外だろうと、厭わず話を聞いてくれる。それは相手が僕だからというわけではなく、他の騎士たちでも変わらない。

部下たちから慕われる騎士団長の、いつもながらの包容力に、思わず笑みが零れる。

「少々込み入った話になります。詳しくは戻りの馬車の中で説明しても？」

騎士団棟の団長室とはいえ、扉のすぐ外に立たれては話が漏れ聞こえてしまう。その点、移動中の馬車の中なら安心だ。

同意した義父上がすぐに席を立つ。

今回のヴィオレッタ嬢の件。彼女の抱える事情は少々複雑で表立つての調査が難しいため、バームガウラス公爵家の諜報部隊を使うつもりでいる。

つまり、騎士が騎士団長に行う報告ではなく、僕が個人的に義父上に打ち明ける極秘の相談。そこにあわよくば、騎士団長としての情報網と知識と伝手を貸してもらいたいという甘えを多分に含んでいる。

だが義父上ならば、事情を知れば間違いなく協力してくれるだろう。

王国の騎士団長を個人的な戦力として引き込もうというのだから、職権乱用もいいたところだ。ヴィオレッタ嬢をあつちの屋敷に縛りつけておきたい奴は卑怯と僕を罵るかもしれない。

だが、それがなんだ。構うものか。僕はどうしても、絶対に、確実に彼女を解放すると決めたのだ。

屋敷に戻る馬車をゆつくりめに走らせ、まずは巡回中の出来事——ヴィオレッタ嬢を保護するまでの経緯を報告すると、義父上は家名に眉根を寄せる。

「レオパーファ侯爵家と言えば、夜会でいつもお前の後を追い回していた令嬢の家じゃないか。前妻の娘を用人扱いとは……」

「はい。あの非常識で、無礼で、けばけばしい令嬢とは似ても似つかない、可憐で、清楚で、健気な令嬢でした」

「……ほう。可憐で清楚で健気……」

義父上はなぜか目をばちばちと瞬かせた後に、僕の顔をじっと見つめる。

何かおかしな点でもあっただろうか。首をかしげた僕に、義父上はこほんと咳払いをして話を続けた。

「ええと、そうなんだね。団長になってしまうと、なかなか詰所に行く機会がなくてね。ふむ、そうか。その可憐で清楚で健気な令嬢に会えなくて残念だよ」

「ああ、そうですね。ヴィオレッタ嬢を救い出した時に、義父上にも紹介しますね。きっと、義父上とも気が合うと思います」

「……そうか、紹介してくれるのか。なるほど、楽しみにしているよ」
義父上はなぜか、笑いを噛み殺したような微妙な表情で僕を見ている。

「……ええと、何か変だったでしょうか？」

「っ、いや、何も、何もおかしくないよ。ああ、いや、レオパーファ家はおかしいが」

「……？　そうですね」

「んんっ、あゝ、ランス、いいから気にせず話を続けてくれ」

「分かりました。では、次にヴィオレッタ嬢の母君なのですが……」

母君の生家について聞いた義父上は、思案げに顎をさすった。

「トムスハット公爵家か」

「現公爵の妹君だそうですね。体が弱くて、あまり社交はされていなかっただけですが……、義父上はお会いしたことがありますか？」

「トムスハット家は大きな商会を持っていて、代々そちらの経営に力を入れている。騎士職のパームガウラスとはあまり縁がないんだ。だが、現公爵家当主のハロルドとは面識があるよ。そういえば、体の弱い妹がいると言っていたのを聞いたことがあるな。そうか、その妹君がヴィオレッタ嬢の母君か……」

記憶を辿っているのか、義父上の視線が窓の外の間へ向けられる。

「そこまで親しいわけでもないが、ハロルドは芯のある真っ直ぐな男だ。姪御君の不遇を黙って見ているとは思えないが……」

「義父上のおっしゃる通りです。ヴィオレッタ嬢によると、彼女の伯父君が動いているそうです」

「なのに、母君が亡くなって四年経ってもまだ状況が変わらないのか？　トムスハットのほうが爵位は上だ。レオパーファ侯爵だつて無下にはできないはずだが」

「それが……人質を取られているので、彼らが無事に保護するまでは屋敷から逃げ出せないと、

ヴィオレッタ嬢が……」

「人質が……？ うん？ ちょっと待て、ランス。今、彼らと言ったか？」

義父上はすぐに一番の問題に気づいた。僕は重々しく頷きを返す。

「はい。人質は四人、ヴィオレッタ嬢の乳母の一家です」

「一家四人を人質にだと……？」

義父上が絶句する。無理もない、僕も同じ気持ちだ。

ヴィオレッタ嬢の心境を思い、僕は拳をぐつと握りしめる。

乳母の一家。幼い頃から世話を受け、共に時間を過ごした人たち。必然的に、感情面で強い繋がりができる相手だ。

僕であれば、乳母のマーガレットとトンブソン先生、そして今は側近となったアルフトクルト。

もし彼ら全員を人質に取られたら、僕だってまず救出の道を探るだろう。

近い者を人質に取って言うことを聞かせる——実に卑怯な手だ。それを使ったのが、よりにもよってヴィオレッタ嬢の実の父親。彼女の心痛はどれほどのものだろう。

「では、ハロルドはまず人質の保護に動いているわけか。だが、それでも四年は時間がかかりすぎていやしくないか？ トムスハット家は事業も成功していて、金も権力も地位もある。私設騎士団も抱えているはずだ。国内広しといえども、一家であれば、個人を捜すよりも容易いぞ」

義父上の指摘はもつともだ。

捜す対象が多ければ、年齢や性別、容姿、構成人数などから、痕跡や特徴を見つけやすくなるは

ずで、僕も疑問に思っていた。

しかし、ヴィオレッタ嬢はこの点に関して何も知らないようだった。ここでふと、数刻前にジャックスと交わした言葉を思い出す。

「そういえば、迂闊に動けない、というような内容をヴィオレッタ嬢の味方らしき護衛の男が口にしていました」

それがレオパーファ侯爵の敷いた監視体制と仮定して、トムスハット公爵による人質の搜索に影響を与えているとしたら……？

「なるほど。他にもまだ、レオパーファ侯爵が謀^{はかり}を巡らしているものがあるかもしれない、という事か。だからハロルドも思うように動けずにいる、と……？」

「おそろくは」

「ふむ。確証はないが、その線は濃いかもれないな」

あらかたの報告を終え、僕は御者台側の小窓を開き、屋敷に向かうように告げる。

「……あの、義父上」

馬車がゆっくりと進路を変更する。この場所からならば、そう時間もかからずにバームガウラス邸に到着するだろう。僕は少し早口で言葉を継ぐ。

「トムスハット公爵ですが、面識があるなら、義父上から連絡を入れてもらってもよろしいでしょうか。公爵からも話を伺いたいのです」

「いいとも。私が行って聞いてこようか？」